Fate　銃使いと聖杯戦争

００フリーダム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ　銃使いと聖杯戦争

【Ｎコード】
Ｎ４３４７Ｙ

【作者名】
００フリーダム

【あらすじ】
合わせ鏡が無限の世界を形作る様に、現実における運命も一つではない。同じなのは欲望だけ。全ての人間が欲望を背負い、その為に・・・戦っている。そしてその欲望が背負い切れない程大きくなった時、人は・・・サーヴァントを呼び聖杯を求める。聖杯をめぐる戦いが、始まるのだ。
「問おう。貴方が私のマスターか」

◇だいぶ設定が変わりました。

原作道理じゃなくなります……たぶん
それとあまり完成度を求めないでください

第０話　地獄の中で（前書き）

修正したものを投稿します。

だいぶ変わりましたが。

とりあえずもう一話も上げておきます。

第0話　地獄の中で

そこには死しかなかった。

辺り一面、火それしかない……まさに死しかない地獄だった。

その中に二人の人影があった。

どちらも疲弊した様にしていたが姿はまるで違った。

片方は、黄金の鎧をし後ろに無数の武器を浮かべており、普通でないもとすぐにわかる威厳を出しており、

もう片方は、蒼いコートをしており黒と銀の色の装飾のされた銃を構えていた。

???「誰の許可を得て立ち上がる？この雑種、風情が！！」

黄金の鎧をしたものが叫ぶそれに反発するように、蒼いコートをしたものが、

???「誰の許可なんかとる気なんかない……俺はお前を許さない、たくさんの人を傷つけたお前だけは絶対に！！」

その言葉にキレたのか黄金の鎧をしたものが、

???「ほざけ、雑種が！！」

その言葉とともに後ろに浮いていた無数の武器が動くそれと同時に、

蒼いコートをした男の持つ銃から銀色の光が撃ち出され無数の武器と銀色の光が交差した。

第1話　全ての始まり（前書き）

……本編はまだ先です。

感想、アドバイスお願いします。
できるだけやさしく、長い目で見てください。

とりあえず毎週更新します。

第1話　全ての始まり

誰でも思ったこと分あるんじゃないのか。

転生したい、異世界に行きたい、アニメの世界に行きたい、…ｅｔｃ．そして知るんだそれがかなわない夢ってことを。

俺自身そう思っていた。絶対に叶わないってことに。

そんなある日突然俺は死んだ。まるで、デスノートで名前を書かれて心臓発作で死んだみたいに。

だって、普通に暮らしていて宿題していたら急に胸が苦しくなってさとっさに出た言葉は「なんじゃこりゃ」だった。

そしたら、神か天使かよくわからない奴がいて「ごめん間違えて死なせちゃったごめんね？」とか言ってきたらどうする？とりあえず俺は何も言えず絶句したままだった。

最初に出た言葉は「えっ」だった。

そのまま俺の言葉は無視で「成るべく似た世界に転生させるから後色々な能力とかあげるから許してね～」とか言って俺の意識はなくなっていた。

とりあえず俺が思ったことは人の話聞けだった。

そんなこんなで９年ぐらいたった。

俺は孤児院で育った、九歳の時には無くなったが。

その後俺は十四才まである人に育てられた。

そいつは何でも教会の人間らしいが俺は教会と言うものをよくわからなかったし興味もなかったが、あまり好いていなかった。

性格は好きだが、色々俺に面白半分で死徒やらに挑ませる奴をどうして好くことができる？

まあ感謝はしている。そのおかげで強くなったわけだし。
最近は依頼とか持ってきたりしてくれるが、ネロ・カオスと戦って撃退したといううわさが広まってからはあまり、困らなくなっているが。他にも、死徒とか魔術師と戦っているせいか死神とか言われるし。まあ、仕事でいろいろな奴と知り合っているが、アルトルージュ＝ブリュンスタッドつまり真祖の黒姫に会ったときは驚愕した。部下のリィゾとフィナとも知り合いだが……正直フィナにはあまり会いたくない。
簡単に言ったら、がちである意味阿部だから。
そんな風に二度目の人生を生きていた時、俺が十九才になると同時に何故か手に痣ができていた。

「ってわけなんだかこれ何か分かるかアルト？」
現在俺はこのよくわからい奇妙な痣について知ってそうな真祖のアルトに電話していた。

「たぶん、令呪よそれ」
令呪？なにそれおいしいの？

「違うわよ。聖杯戦争って知っている？」

「知らない。ってか人の心読むな」
可笑しいのかアルトは笑いながら、

「悪いけど予想ぐらいできるわよ。それと聖杯戦争っていうのはね……」
アルトの説明によると、曰はく六十年周期で起こる魔術師の戦争で、

令呪はその参加資格でありサーヴァントを従わせるものらしい。サーヴァントは過去に存在した英霊らしい。聖杯は何でも叶う願機らしい。
とりあえず俺がつぶやいた言葉は、

「どこのドラゴンボールだよ。ってかなんか昔そんな設定の仮面ライダー見たような……」

「何言ってるかわからないけどどうするの？ちなみにあと一年はあるわよ」
正直どうでもいいがここは、

「参加する。正直聖杯がどんなものか見たいし英霊に会ってみたいしな」
ちょっと、どんな奴らか気になるし。

「ならとっとと召喚した方がいいわよ。いいやつかはわからないけど早めにしておいた方が色々楽でしょ？」
まあ確かにその通りだよな～

「まあ今日中に召喚するよ。そういえば召喚には何か必要なのか？」
そこがかなり気になるんだが…

「確か英霊に纏わる聖遺物が必要らしいわよ。なくても平気らしいけどその場合マスターに性格が似たサーヴァントが来るらしいわよ
後、さっき言った魔法陣と呪文よ」
なら別にいいか

「なら特に問題はないな悪いな助かったよ」
正直なんかのはずみでやらかしたかもしれないし

「別にいいわよ。英霊を呼んだら誰かぐらいは連絡しなさい、気になるから。そういえば今どこにいるんだったのかしら？」
俺が今いるのは……

「イギリスだけど」
何か問題あるのか？

「ふ～ん。まあ気をつけなさい。令呪がやどったことがばれたらいろいろ面倒よ」

「了解。んじゃあな」

そう言って俺は電話を切った。
とりあえず、血を用意するのは面倒だから赤い水性ペンキでいいか。

第1話　全ての始まり（後書き）

次回から没ネタまたは裏話をやります。

お楽しみに

第2話　召喚と腹ペコ（前書き）

2話目です。

聖杯戦争はまだ先になります。
結構やりたいことがあるので。

メイシーさん、マージスさん、花京院典明さん、群雲さん、戦闘員一号さん感想ありがとうございました。

感想、アドバイスお願いします。
できるだけやさしく、長い目で見てください。
ではどうぞ。

第2話　召喚と腹ペコ

赤い水性ペンキで魔方陣を書き終わった俺は八時になるのと同時にアルトに教えてもらったサーヴァント召喚の呪文を唱えた。
「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！！」
言い切ると同時に周りが光って煙が出たんだけど成功だよな？
マジで不安なんだけど……そんなことを思っていたら、魔方陣の上に一人の青い騎士恰好をした奴がいた。
そしてこんなことを言ってきた。

「問おう。あなたが私のマスターか？」

その問いに俺は、

「とりあえずそうだけど、えっとお前は何のクラスで真名はなんだ？」

「わかりました。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある、ココに契約は完了した。それと私はセイバーです。真名はアルトリア・ペンドラゴンですが騎士王と言った方が分りやすいでしょう」
ちょっと待て、なんで触媒なしだそんな大物呼んでるんだよ！！
ってか騎士王は男じゃないのかよ！！
さっきの反応からアルトなんか絶対に知ってるよなこれ！！

など心の中で突っ込みながら頭を押さえて

「まいいや、とりあえずこれ」

と濡れた雑巾を渡した。

「？マスターこれは？」

とセイバーが渡したものが解らないのか聞いてきた。

「濡れ雑巾だけど。ってかお前「そうじゃありません！！」じゃあ何だよ。後、俺はタツヤ・Y・レスタールだ」

分らないかと思って答えたら思いっきり否定された。

「それではタツヤと。そうではなくこれを私に渡してどうしろというのですか！！」

とセイバーが怒って言ってきたので、

「今から下の陣を消すから拭くんだよ」

俺たちがいるのは家の中。さすがにこのままだといろいろ大変だし。

「血で書いたものを濡らした雑巾で消せるんですか？」

「ああ、それ血じゃなくて水性ペンキだから問題ないから」

「……わかりました。」

なんか不服そうにしているセイバーを俺は尻目に掃除を開始した。

「フフフ、やっぱり騎士王が出たのね」

掃除が終わって遅めの夜食が終わった俺はアルトに電話していた。

「やっぱり気づいてたのか。教えてくれてもいいだろ」

「悪いけどそれは無理よ。たぶん円卓の騎士の誰か辺りだと思っていたのだけどまさか騎士王を呼ぶとは思わないわよ。それに騎士王が女のも知らなかったわよ」

何でもアルトが言うには土地が触媒になったらしい……なんじゃそりゃ

「まあいいじゃない。あなたの戦いからして前衛の戦いをしてくれる人で」

「まあそうなんだが……あれは無い」

そう言いながら俺は飯を食っているセイバーを見る

さっきまでの威厳がどこに行ったのかわからないくらいの勢いでモキュモキュ言いながら十皿目に入ったセイバー。

ってかまだ食うのか！？

「まるで騎士王じゃなくて暴食王か腹ペコ王だぞあれ」

と若干、焦りながら俺は言った。

「フフフ、正直見たいわね。それと聞いた話なんだけどアイツンベ

ルンってわかる？」
確か聖杯戦争を始めた始まりの御三家って呼ばれてる奴らだよな。
「ああ、御三家の…それがどうかしたのか？」
俺が疑問に思って聞いたらアルトが、
「実はねそのアインツベルンが今回召喚しようとしていたのが騎士王らしいわよ」
「……はぁ！？」
ちょっと待てかなりまずいだろそれ！
「それと聞いた話だと聖遺物で鞘を使おうとしてるらしいわ」
セイバーの鞘って……セイバーが言っていた失われた宝具のアヴァロンかよ！！
「おいそれマジか！」
びっくりしてアルトに聞き返すと、
「悪いけど本当みたいよ。取引はされたみたいだし。ただ場所はわからないから自分で探しなさい」
「だとしても十分すぎる情報なんだけど。元々探すつもりだったからさ」
時間はあったから探すつもりだったし。ただ人の手にあるのか～……盗むか。
「そう、まあ頑張りなさい。じゃあ切るわよ」
そう言ってアルトは電話を切った。

ってか前から思ってたけどなんで千年城に電話線が通ってるんだよ！
……今度聞いてみよ。
そんなことを思いながら俺はもう一人の友人にあることを調べてもらうために電話しだした。

「いったいなん皿食っているんだよセイバー」
とりあえず電話をし終わった俺が最初につぶやいたセリフがそれだった。

「むっ…別にいいでしょう。おいしいんですから」
と何故そんなことを言うのかと疑問な風にセイバーが返してきたので、

「それ明日の飯も含めていたんだが……何も残っていないぞ」
そう、明日の飯の仕込みこみで俺は夕食を用意したのに全部食い散らしやがったコイツ

「えっそれってつまり……」
何か絶望に染まってくセイバー。
それに俺は、

「ああ、明日の飯は無い」
と事実を言った。

「くっ。なぜ食材を買っておかないんです！！」
何故ってお前、

「お前がそんなに食わなかったら足りていたから」
「……つまり私の所為だと言いたいんですか」

「それ以外あるか」
と言うとセイバーが、

「……」
何も言えなくなっていた。
ってかブリテン滅んだのって実はコイツの腹が問題の食糧危機とかって落ちじゃないよな

「……ところでタツヤさっきの電話はどんな用事だったのですか？」
ショックから立ち直ったのかセイバーが聞いてきた。

「知り合いとちょっとな。後お前の宝具のアヴァロンが見つかった見たいだぞ」
その言葉にセイバーが、

「それは本当ですか！！それで今どこに！」
驚愕して聞いてきた。

「一応な。今、知り合いに確認してもらってるから落ち着けって」
そう言ってセイバーをなだめる

「す、済みません。ところで明日のご飯は……」
本当に腹ペコ王か暴食王だろこれ。

「とりあえず、外食だな……お前は……食べるのか」
「当たり前です！」

さも当然の様に言ってきた。
……とりあえず財布が空になるのを覚悟して銀行からおろした方がいいな

第2話　召喚と腹ペコ（後書き）

セイバーを召喚し、掃除も終わりアルトに電話をしようとしたんだが俺は飯を食ってないことに気が付いて明日の朝飯込みでカレーを作り食べようとしたんだが、セイバーがこっちをじっと見ていたので俺は、

「……どうかしたのかセイバー？」

「……別になんでもありません。別にご飯が食べたいわけではありません」

そう言われてもカレーを口に入れようとするたびに、なんか表情変えていられたら、

「……食べるかセイバー？」

「いいのであれば」

そう言ってものすごい速さで席につくセイバー。

そんなに食べたかったのかよ。

そんなことを思いながら飯を用意する俺だった。

後でセイバーの食欲を知って絶句するとは知らずに。

第3話　情報と準備（前書き）

3話目です。

次話では読めばわかりますが、あそこに行きます。

マージスさん、群雲さん、戦闘員一号さん、myoonさん、縦脇さん感想ありがとうございました。

感想、誤字報告があればお願します。

ではどうぞ。

第3話　情報と準備

現在俺とセイバーはロンドンのファミレスで朝食を食べているんだが……

「なあ、セイバーいい加減にしないか」

「何がですタツヤ？」

「食べるのをいい加減にしろ」

そう、こいつはかれこれ一時間は食べている。

待ち合わせまで時間があるから先に飯でも食べるかと言う話題になった途端、こいつ店のメニューを全部注文しやがった。

おかげで俺はドリンクバーだけだ。

「なぜ辞めなくてはならないんです。そもそもじゃんけんで勝てば好きなだけ食べていいといったのはタツヤでしょう」

確かに言ったぞ。最初は二品だけって言ったのに「二品だけでは満足できません」って言って口論になってさすがにまずいからそう言ったがなセイバー、

「物には限度があるだろ。限度が」

俺がため息交じりにそう言うと、

「仕方ありませんね。まあ腹八分目って言いますしね」

おい、店のメニュー全部食ってまだ腹八分目かよ……今ならコイツの腹が原因で滅びったて言われても信じられる

「……どんな状況なの。これ」
そんなことを考えていたら、待っていた相手、俺の古い友人が来た。

「……そ、そうなんだ」
セイバーがかなりの大食いと言うことを説明すると若干引きながらそう言った。

こいつはクルファス・フレル。
俺はクルスと呼んだいるが。
時計塔の講師で俺の古い友人の一人で趣味が色々な情報収集。

「それで頼んでいた奴は？」

「ああ、これだよ」
そういって、他のマスターの情報の資料を渡してきた。

「もう一つは？」
セイバーに資料を渡しながら聞いた。
アイツンベルンの情報に例の物も頼んだよな？

「これだよ。結構苦労したよ」
とさっき渡された封筒よりも少し厚い封筒とトランクケースを渡された。

「結構厚いな」

「アヴァロンの写真に城の見取り図、およその兵力…ｅｔｃあるからね」

おいおい俺が頼んだの昨日だぞ。
「以前から聖杯戦争の事は以前から興味があって調べたからね」
……
「人の心を読むな」
「タツヤ、顔に出ていましたよ」
「まったくだよ」
「……俺、顔に出やすいのか」
「「はい（うん）」」
「……とりあえず資料の説明を頼む」
俺は若干落ち込みながらそう言った。

「フフフ、わかったよ。まず、遠坂時臣。火の属性で宝石魔術の使い手で遠坂家当主。二人目が間桐雁夜。一時期間桐を離れていたけど戻ってきて参加するみたいだよ。三人目がケイネス・エルメロイ・アーチボルト。僕と同じ講師だけど彼は神童とか言われているけどね。風と水の二重属性を扱っていて降霊術、召喚術、錬金術に通じているよ。切り札とかもあるけど口で説明するより資料を後で見たほうがいいよ。四人目がウェイバー・ベルベット。彼は特に無いかな。彼が持つ聖遺物だけわかったから載せておいたから。五人目が言峰綺礼。元聖堂教会の人間だけど、今は魔術協会に転属して遠坂時臣の弟子になったけど……」
クルスが言葉を濁らせるのと同時に俺は言峰綺礼の資料を見る。
「こいつは……」
「……うん。不思議でしょ」
「どうゆうことですか？」

そう聞いてくるセイバーに俺は資料を渡す。

「……すごいですが、何故あと一歩の所ですべてやめてしまっているのですか？」

もっともな疑問だ。

出世街道から協会に転属。挙句の果てに一時期とはいえ代行者にまでなっている。

なのに突然すべてやめている。魔術に関しても同じだ。

「さあな。それが不思議なんだよな。ある意味一番厄介かもな」

「うん、あともう一つ」

指を立ててクルスが言ってきた。

「遠坂の弟子になって令呪がやどったってどう思う？」

「何かあるのか？」

そう言うとクルスは顔を少しこわばらせ、

「実は彼の情報を集めている時に偶然見つけたんだけど、彼が遠坂に弟子入りする直前の写真にねあるものが写っていたんだ」

そう言って出してきた言峰の写真の手には令呪が写っていた。

「タツヤこれは……」

「ああ、たぶん遠坂と言峰はグルだな。それに監督役も」

いくらなんでも気づかないわけが無いだろ実の父親が。

「そう見て間違いないと思うよ。そして六人目が……衛宮切嗣」

おいおい、やばすぎだろ。

「あの、魔術師殺しで有名な？」

「うん。七年前にアイツンベルンに婿養子として向かいいれられた

んだ。たぶん今回が目的だったんだろうね」
魔術師殺しの衛宮切嗣。
……たぶん、今回も手段を択ばないんだろうな。
「誰ですか？その…魔術師殺しと言うのは？」
「魔術師殺しの衛宮切嗣。魔術師を殺すのに特化し目的のためには手段を択ばない…殺し屋かな。後、お前を呼ぼうとしていた奴」

「……そうなんですか」
そう言ってセイバーは顔をゆがませる。
当然か、自分を呼ぼうとしていた男が目的のためになら手段を択ばない奴だということを知ったんだから。
ある意味、セイバーと衛宮切嗣は対極的なのだから。
片や騎士道に生き片や目的のためになら関係のない人間がいても実行する。
おそらく呼んでも分り合う事は無いんだろうな。

「それと彼が殺した魔術師の死に方なんだけどね」

「どうかしたのか？」

「その全てとは言わないんだけど大半が魔術回路が完全にオーバーフロウを起こしたものがあるんだ。そして彼は魔弾を使う。たぶん、」

「……俺と同じで魔術師の天敵方の魔弾か、厄介だな」

その言葉にクルスが頷き、
「わかってると思うけどその魔弾には絶対に当たっちゃいけない、迎撃か回避のどちらかにしなきゃいけない。まあタツヤなら大丈夫だとは思うけど」

まあ、狙撃の迎撃は余裕だしな。
「大体これぐらいかな。……それじゃあ講義があるから僕はいくね」
そう言ってクルスが立ち上がる。
そういえば結構時間が経っていたな。
「ああ、助かったよクルス」
俺がそう言うとクルスはこちらを見ず、
「死なないでねタツヤ」
そう言ってクルスはこちらを見ず立ち去った。

「タツヤ」
「んっなんだセイバー？」
口を閉じていたセイバーが話しかけてきた。
「彼とはどうゆう関係なんですか？タツヤの職業上接点が見えないんですが……」
そういえば説明していなかっな。
「一時期時計塔に居てな、その時にな」
本当に一時期だったな。一か月もしないうちに離れたし。
「なるほど。それでそのトランクケースの中身はなんなんですか？」
とさっきクルスからもらったケースを指すセイバー。

「ああ、これには、特殊な魔術礼装と、魔術を使うための道具が入っているんだよ。俺が使える魔術なんてたかが知れてるからな。それに、明日には泥棒に入るのに準備不足はまずいからな」
その言葉にセイバーが、
「……どうゆう意味ですか？」
少し顔をこわめて聞いてきた。
「そのままの意味。明日にはアインツベルンの城に忍び込むから」
「……聞いてないんですが」
「言ってないからな。ってか、お前を元々連れてく行くつもりは無いからな」
さらにセイバーが声をこわめて、
「何故連れて行かないか理由を聞いても？」
そんなことを聞いてきた。
「理由も何もお前連れてくより一人の方がやりやすい。それに騎士王様に盗みやらせるわけにはいかないだろ」
その言葉にセイバーが納得したんだかして無いんだか微妙な顔をしてきた。
「……わかりました。ただ、「食費？」そうです。……って違います！！」
あれ違ったか。てっきりそうなんだかと思ったんだが……
「いえ、違くないんですが。そうではなく、ちゃんと戻ってきてく

ださいよ」

「……意外だな、心配してくれるんだ」

本当に意外だ。

「当り前です、私のマスターは貴方なんですから」

少しムスッとした顔でセイバーが言ってきた。

少しの間、キョトンとしてから俺はその言葉に嬉しく思い苦笑しながら、

「了解」

そう言った。

余談だがここの会計で俺の財布が空になり銀行に寄った時に思ったことは、

「……アイツ一人で残して、無駄遣いしないよな……」

残した金が全部食事で消えている光景だった。

第3話　情報と準備（後書き）

待ち合わせのためにファミレスに来た俺とセイバー。
「ちょっといいかセイバー？」
メニューを意気揚々と見ているセイバーに、声をかけた。
「なんですかタツヤ？」
「……頼んでいいのは2品だからな」
その言葉にセイバーが、
「……ほ、本気で、い、言っているんですか」
慌てて言ってきた。
「当り前だ」
コイツに自由に注文させたら、どうなるかわかったもんじゃない。
「ふざけないでください。とても足りません！！」
そんなに怒ってもな〜
「だめだ」
「この分からず屋！！」
こちらをにらんでセイバーが言ってきたので、俺は思わず、
「うるさい！！この腹ペコ王！！」
と言ってしまった。
そのまま俺とセイバーはにらみ合いながらお互いに、売り言葉、買

い言葉を繰り返していると、

「「うるさい！！」」

……案の定周りの人とかに怒られた。

てか、結界忘れていた。

「……ならばこうしましょうタツヤ」

少ししてセイバーが話しかけてきた。

「んっ？」

「じゃんけんで勝った方の意見を通すということで」

……確かにこのままでは、周りに迷惑だし仕方ないか。

「わかった。お前が勝てば、好きなだけ食えばいい。俺が勝ったら……わかっているな」

その言葉にセイバーは、

「ええ、2品で我慢しましょう。いきますよ……」

そしてじゃんけんをした。

結果、俺、グー、セイバー、パーで俺の負けだった。

そして、セイバーは待ち合わせの相手が来るまで食べ続け、俺はドリンクバーだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4347y/

Fate　銃使いと聖杯戦争

2011年11月19日22時58分発行